

そこで、再び寺院内を嗅ぎ廻はして見て、又更に馬の死骸を嗅いで見たが、少しも食べない、も一これで十分安全だと見た所から、急いで、外へ出て仲間を呼びに走った。

一瞬間にして、彼は再び門内へ飛び込んだが、續いて、二十二匹の狼の群が飛び込んで來た。皆が静かに死馬の方へ急いで行つたが、やがて、喝え切つて居た食事を、ムシャく〜〜と始めた。すると忽ち、入口の方に當つて、ビシンガタンと恐ろしい響がした、鐵門の戸が落ちたのである。

屹驚して、狼どもは一度にバッと散つた、そして一時に門へ衝き進んだが、門は既に閉ぢられて居る。そこへ以て四方の窓から、トーン〜〜居る。鐵砲が打ち始まつた、是に至つて狼どもは、始め

▲田舎者が東京へ出て來て、書飯を食べよーと思つて、あるおすし屋へ這入つて おすしを注文しました。『おかみさん このおすしは幾許ですか』

て自分等が捕はれ物になつて、今や正に死地に陥つたことを悟つたのである。

そこで、狼共は皆屋敷の眞中へ歸つて來て、彼の最初皆を案内した所の古狼を取り巻いて、大勢で何か宣告でもする様にうなつて居たが、一つの合図で以て四方から一度に突進して、遂に彼の古狼を、散々に食ひ殺して仕舞つた。

それからは、皆が別に騒ぐ様子もなく、自若として運命に甘んじ伏して悉く射殺されて仕舞つたといふことです。

笑ひの種

居る。そこへ以て四方の窓から、トーン〜〜居る。鐵砲が打ち始まつた、是に至つて狼どもは、始め

『ハイ御一人前が十二錢です』では、れすしの側にある生姜は『ホッホ、それは附きものですからただです』ジャ一私は、生姜だけ頂きますべー』

▲背くある處に、大旱があつて何日経つても雨が降らない、草木五穀一切枯れて仕舞つて、今にも大饑饉が始まりさうであつたので、其處の王様が大變に御心配せられて、家來共に、誰か雨を降らす人があるまいと尋ねられました。すると一

人の家來が『雨を降らすに妙を得てる者は、龍の外にありますまい』と申し上げる、『さらば直様其者を召せ』とありて、早速龍を召し出して、雨を降らす事を命じになつた。神變不思儀の術を心得た龍は、何か兜をしました所が、不思儀や今迄の晴天、見るゝかき曇りて、忽ち沛然として

大雨となつて、打つて變つての寒さに、五体も戦慄へる許り、そこで、王様は『あーもー宜い、これで澤山だ、どーも大變な大雨になつたもんでも寒くって堪らない、どーか前前の術で、今一度温くなる様にして呉れないか』龍温かくする事は、私の手では參りませぬ、それは私の伴に御命し下さいまし』玉フーン お前の伴といふのは』

龍はい コタツでござります』

考へもの

前號の石の中に隠れてるといつたのは「火」です、兄弟と云ふのは、風の事です。

愛讀諸姉の一人から、次の考へものが出来ました

やつてご覧なさい。